

神からの賜物としての義

詩篇 143 篇

あなたのしもべのさばきにたずさわらないでください。生ける者はひとりもみ前に義とされないからです。(2)

この詩は「七つの悔い改めの詩篇」の一つとされ、ルターはこの詩をパウロ的詩篇と呼んでいます。この詩の中に、パウロの書簡に見られるような義の概念が出てくるからです。

主イエスが最も厳しい断罪の言葉を語つたのは律法学者やパリサイ人たちに対してでした。彼らは旧約の律法を熱心に守ることによつて自分たちの正しさ、義を神と人の前に主張したからです。けれども彼らの本当の姿は、自分たちの醜い部分には目をふさぎ、良い行いをもつて罪を覆い隠そうとしているに過ぎませんでした。詩人はここで、「生ける者はひとりもみ前に義とされないからです」と告白しています。正しい行いに励むこと自体はとても素晴らしいことです。けれども間違つてはならないことは、それによつて神の前に義と認められるわけではないということです。誰も自分の力で義を獲得することはできません。ただキリストの一方的な憐れみのゆえに、義を与えていただくしか道はないのです。「主よ、み名のために、わたしを生かし、あなたの義によつて、わたしを悩みから救い出してください」(11)。

自らの正しさのゆえではなく、神の憐れみのゆえに義なる者と認めていただいたに過ぎない自分であることが本当に分かつたなら、誰ひとりとして自分を誇るなど出来なくなるはずです。わたしたちはお互いに赦された罪人に過ぎないのです。